

監修

佐佐木信綱
新村出
津田左右吉
辻善之助
山田孝雄
和辻哲郎

良寛歌集

吉野秀雄校註

朝日新聞社刊
日本古典全書

日本古典全書

「良寛歌集」 吉野秀雄校註

昭和三十年十月三十日初版改裝

印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 朝日新聞社（東京都千代田

區有樂町・大阪市北區中之島・

小倉市砂津・名古屋市廣小路）

定價 二三〇圓

目次

解

説・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・一

良寛調について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・一

良寛の歌の發足・個性・推敲について・・・・・・・・・・・・・一五

發足・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・一五

個性・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・一六

推敲・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・二二

良寛と萬葉集との關係について・・・・・・・・・・・・・二三

本集の成立ちについて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・三七

諸本の校合・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・三八

古歌との對比・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・四〇

配列の順序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・四二

凡 本

語句歌意の解釋	四二
内容の多化と純化	四二
餘言	四三
参考文献	四六
例	五〇
文	五五
短歌	五五
春	五五
夏	七九
秋	九〇
冬	一一一
雜	一二九
旋頭歌	一九六
雜體歌	二〇二
長歌	二〇四

解 說

良寛調について

どんな議論をもさし措いて、いきなり良寛の歌境の唯中に入つてみることにしよう。それも理念を有たず、思ひ出すままに歌を抽き出すといふやうにしたい。



雪の夜にねぎめて聞けば雁がねも天つみ空をなづみつゆく

類歌に「ひさかたの雲居をわたる雁が音も羽白妙に雪や降るらむ」があり、その方には「きさらぎの末つ方なほ雪の降りければ」といふ詞書がついてゐる。一首至極平淡で、しかも下の句は人の世の無量の寂寞感をひびかせてゐる。雪空をゆきなづむ雁と作者との間にはすでに一毫のけぢめもなく、よろこびをものなしみをも自然と共にした良寛の、ここでは悲痛の呼吸が感じられる。それは眞向より強烈に襲ひ來るものとは異り、しみじみと浸透しついつしらず胸中の奥處に達してゐることに氣づくといふ具合のもの

である。

「ひさかたの」の方には、古歌の「梅が枝に鳴きて移ろふ鶯の羽白妙に沫雪ぞ降る」の影響が明らかであるが、この歌が萬葉集所出であつて且つ新古今集にも同じ形で出てゐることが注意される。

ちんばそに酒に山葵わさびにたまはるは春はさびしくあらせじとなり

詞友の阿部定珍から、ちんばそ——神馬藻を音讀した訛りで、海藻のほんだはら——や酒や山葵を贈られて詠んだもの。「ちんばそに」の方言使用も素朴だし、「酒に山葵に」と重ねてもうるさからぬし、殊に第四五句の使役法によるいひまはしが非凡で、それは定珍に對する親愛と感謝の念の遺憾なき現はれであると共に、作者の心底夙に春のさびしさ——秋のさびしさならぬ一種甘美なやるせない春のさびしさ——を湛へてゐたことをおのづから告げてゐる。

一首、構へやはからひがない。あるがままの自然の流露であり、しかも作歌技術として下の句の抑ふべきところはきちんと抑へてゐる。

草の庵に足さしのべて小山田の山田のかはづ聞くがたのしさ

初二句は良寛の詩句「夜雨草庵ノ裡、雙脚等閑ニ伸バス。」に相應するが、この「足さしのべて」は例へば托鉢の疲れを醫してゐるといふやうな實際の状態であつて、まことに空疎でない。「小山田の山田の」と準枕詞を使つて調子をとりながら、決して浮薄でない。「聞くがたのしさ」も、熟じきつて流れようと

するとところを危くひきとどめたるまみを保つてゐる。

この歌、弟の由之におくつた別傳には、「草の庵に足さしのべて小山田のかはづの聲を聞かくしよし」とある。「聞かくしよし」は萬葉集に「君が御言みことを聞かくしよし」『清き瀬せの音を聞かくしよし』などの例があり、聞くことが快いの意。

この里に手まりつきつ子供らと遊ぶ春日は暮れずともよし

手毬・はじき・草相撲・隠れん坊などをして稚童らと相嬉戯することは、良寛の生の充足の重要な場面であつた。従つて類想の歌はかなり多い。

一首、ほのぼのとして溫く、ふんはりとふくやかに人を包み來る感觸を受けるが、是即ち良寛の人間的愛念を基盤とした諷詠なるがために外ならない。ここに至つては「暮れずともよし」の先例を古歌に求めることなどはもはや無用で、ただ渾然としていかにも良寛の作、良寛以外の誰びのものでもないといひきることができる。

飯乞ふと我が來しかども春の野に莖こつみつつ時を經にけり

托鉢は良寛の生活である。玉の緒をつなぐ唯一の手段である。しかしながら、野べの莖の愛らしさに心惹かれて行乞を怠り、時を忘れることもまた彼の生命のやみがたい欲求であつた。

一首、街氣も誇耀もない。淡如としていふべきをいひ了せてゐる。

むらぎもの心樂しも春の日に鳥のむらがり遊ぶを見れば

「むらぎもの」は枕詞。この歌、單純であつて空虚でない。内に満ち溢れるものをひとたび壓縮した末の單純であるから、却て背景のひろがりを感じさせる。これは類歌の「むらぎもの心は和なぎぬ永き日にこれのみ園の林をみれば」などと共に良寛調の特色をほぼ代表する作といへるが、歌は事柄を叙述するものでなく心情を高らかに調べるものであることを知る者にとつては、同時にこの單純さが容易ならぬ單純さであり、これ以上を抒べる必要はなく、否これ以上を抒べてはならぬ道理をも會得するに難くあるまい。

相連れて旅かしつらむ時鳥合歡ねむの散るまで聲のせざるは

詞書に「五月過さつきぐるまで時鳥の鳴かざりければ」とある。初二句の擬人法は普通厭味なものだが、この際不思議に氣にならず、しぜんに誘ひ込まれてしまふ。それといふのも「合歡の散るまで」の清新さ、みづみづしさに蔽はれてゐるためであらうか。この句は空想では産めない。合歡の散るのを目撃しての把握である。「聲のせざるは」の結句もきびしく、十分に据わつてゐる。

あしひきの國上がみの山を今もかも鳴きて越ゆらむ山ほととぎす

堂堂たる聲調である。萬葉集に「今もかも大城おほきの山にほととぎす鳴き響なむらむ吾無けれども」があるが、これによく學んだ上に別境地を拓き得てゐる。萬葉の口眞似でなく、實地に「國上の山」に住み、實地に「山ほととぎす」を聞いての詠出だからである。時鳥にしろ鹿にしろ何にしろ、百數十年前の國上山附近

では良寛の歌さながらであつたのである。

さびしさに草の庵を出でてみれば稻葉おしなみ秋風ぞ吹く

「おしなみ」は押し靡けて。この歌、一首の調子には萬葉集の秀歌「君待つと吾が戀ひ居ればわが屋戸の簾うごかし秋の風吹く」に似通ふところが無いともいへず、上の句については誰しも後拾遺集の「寂しさに宿を立ち出て眺むればいづくもおなじ秋の夕暮」を想ひ出すであらうし、また下の句は新古今集の「旅寝して曉方の鹿の音に稻葉おしなみ秋風ぞ吹く」の下の句と全然同一なのである。それにもかかはらず、良寛の歌が後拾遺・新古今の二首よりも作品として遙かに上等であり、萬葉集の一首とはまた違つた特有のしなやかな哀切さを徹らせ、みづからの獨立を主張し、良寛調の個性を明瞭に傳へてゐるのは何故であらうか。後拾遺歌の下の句は抽象的・觀念的で甚だたよりない。新古今歌の上の句と下の句は關聯が曖昧で、善意を以て觀てもこしらへごとに過ぎない。これらに反して良寛の歌は、「草の庵」も「稻葉」も「秋風」も眼前の現實をあるがままに採つて來てゐる。同じ言葉を用ゐても精神が別である。そして順直な精神によつて驅使される時、言葉は俄然面目を改め生彩を帶びずにはおかぬ。この一事をよそにして、どこに詩歌の祕密などあらうぞ。

もつとも良寛の歌も、ここに落ちつくまでには、「わせねとる時にと君に契りしに稻葉おしなみ秋風ぞ吹く」や「何となくうらがなしきはわが門かどの稻葉そよがす初秋の風」などを經過してゐるのであつて、もし

もこの「初秋の風」程度にとどまつたならば、かの古今集の「わが背子が衣の裾を吹き返しうらめづらしき秋の初風」あたりをも嘆ふことはできないであらう。

秋の日に光りかがやく薄の穂これの高屋にのぼりてみれば

言葉つきは殆ど口語に近い程やさしく、内容に人の耳を敬てるやうなものがあるわけでもない。それでゐて常に新鮮であり、いくたび誦しても飽くところがない。これを詩歌の眞の高さ深さといふ。

良寛は薄尾花すきはなをわけわけこの家に辿りついたのであらう。たまたま二階かなどに招ぜられて、いまし方よぎつて來た穂薄原の限りない輝きを見渡したのであらう。そしてこの白銀光は、今日われわれのうつつにも「光りかがやく」ことをやめてゐない。

月よみの光を待ちて歸りませ山路は栗の毬いけの多きに

「月よみの光を待ちてかへりませ君が家路は遠からなくに」と共に、五合庵をおとづれた阿部定珍に興へたもので、本集秀逸の一首。栗の毬いけに足を傷めぬやうにといふ心遣ひの濃やかさ、醇粹さに打たれる。

「山路は栗の」も「君が家路は」も、萬葉集の「月讀の光に來ませあしひきの山を隔てて（山を隔へなりて）遠からなくに」の恩恵を蒙つてゐることは世に名高いが、良寛においては格別模倣しようとして模倣してゐるのではない。國上山西坂の徑に栗の毬のあまた落ちてゐるといふ實際、定珍の家はすぐ山麓の渡部にあるといふ實際と、友をなつかしみいたはり、月の出を待つことに託して一刻もながくひきとどめたいと

いふ眞情が先きであり、これを卽座に表現するに當つて、良寛内部に骨肉化されていた萬葉集の詞句が口を衝いて出て來たといふものである。

また良寛の二首が良寛調を漂はせてゐる素因として、萬葉歌が二句切れであるのに對して三句切れである點も考慮に入れねばなるまい。

水や汲まむ薪たきぎや伐こらむ菜や摘まむ朝の時雨の降らぬその間に

良寛を徒らに山澤に逃避する偷閑の隱士とのみ解すべきではなからう。その柴門孤住の寒酸な實生活はほぼこの吟詠の如くである。「や……む」を三たび反復した調子に、おのづから事の多端にせきたてられた氣持が出てゐる。下の句はこれを受けとめ、手堅く引緊めてゐる。

いにしへを思へば夢かうつつかも夜よるはしぐれの雨を聞きつつ

初句、一本に「そのかみを」。一首は往時の追憶である。「好ウツクシシデ黄鵝ワウガノ衫サンヲ著、能ク白鼻クビノ騮ウマニ騎マツルル。朝ニ新豐ノ酒ヲ買ヒ、暮ニ杜陵ノ花ヲ看ル。」（良寛詩句）の橘屋名主見習役としての少年時代、「一タビ家ヲ出デテヨリ、幾箇ノ春ナルカヲ知ラズ。一イチ鉢ハチト一鉢ト、騰騰此ノ身ヲ送ル。昨日ハ山林ニ住ミ、今日ハ城闐シヤウニ遊ブ。」（同）の備中圓通寺及び諸國行脚の青年時代等を想ひ回せば、まことに「汎フキトシテ水上ノ蘋ヒナ（浮草）ノ如シ」（同）の長嘆息を禁じ得なかつたであらう。「夢かうつつか」はやや平俗であるが、「夜よるはしぐれの」に打開の力があり、「雨を聞きつつ」に環境と情懷のものしづけさが出てゐる。

なにとなく心さやぎていねられずあしたは春のはじめとおもへば

詞書に「あすは春といふ夜」とある。「春」は立春の日。雪に埋もれた越路にも春はめぐつて来る。捨身僧伽の身にも春はおとづれて来る。それを童子のやうによるこび、銜はず臆せずあるがままに吐露してゐる。越後の冬の永さ陰鬱さを土臺にしてみる時、この歌は一層の妙趣を覚えさせる。

「はじめとおもへば」の結句は新勅撰集の歌にもあるが、問題ではない。一首、良寛独自の風格である。

山かげの岩間をつたふ苔水のかすかにわれはすみわたるかも

初句は一本に「あしひきの」。第三句は、苔水のやうにで、ここまでが「かすかに」の序。但し文飾のためだけの序ではなく、實景によつて成つたいはゆる實ある序。結句は「住みわたる」であると共に、「心水何ぞ澄澄タル」(良寛詩句)の「澄みわたる」をも兼ねた氣味合ひがある。理窟でなく、直覺的にさう感じられる。

一首、良寛の代表作としての面貌十分である。重重しく張つてゐて、且つ澁滞がない。詠出の基因としては、西行の「山陰の岩根の清水たちよれば心のうちを人や汲むらむ」や傳西行の「とくとくと落つる岩間の苔清水汲みほすほどもなき住居かな」などを擧げてもいいが、表現されたものは萬葉調であり、そして萬葉調中の良寛調として完璧に渾熟してゐる。

この形に決著するまでには、第一に雜體歌の「あしひきの國上の山の冬ごもり岩根より来る苔水のかす

に世をすみ渡るなり」があり、第二には短歌の「山かげの岩根もり来る苔水のあるかなきかに世をわたるかも」があり、鍊磨の苦修察するに足りるのである。

里べには笛や太鼓の音すなり深山はさはに松の音しつ

結句一本に「松の音して」とあるが、「しつ」の方が齒切れがよく、優つてゐる。「さはに」は、しきりに、さかんに。秋艸道人が『渾齋隨筆』の中に、唐の沈佺期の詩句「城中日夕歌鐘起り、山下惟松柏ノ聲ヲ聞ク。」を引いてこの歌と對比させてゐるのは極めて興味深いが、わたしは嘗て五合庵址を尋ねた折に恰も山麓から角兵衛獅子の笛か何かの響くのを聞いた経験があるせゐるか、やはり實景實情と解してゐる。「笛や太鼓」とあるから、或いは孟蘭盆の踊りの囃子であるかもしれない。

第三句で切れて結句で切れ、一首兩斷されてゐるところいかにも無造作だが、そこが却て句句を生動させた所以であるかと思ふ。

あわ雪のなかに顯ちたる三千大千世界またその中に沫雪ぞ降る

釋教の歌。第三句は大字宙の佛教的表現。一首の雪降る中に宇宙があり、宇宙の中に雪が降るといふ思想が、人間對自然の微妙甚深の關聯を端的に直示象徵してゐる。「三千大千世界」を「みちおほち」と國語に和らげた手際にも感心する。

但しこの一首のよさは、觀念・哲理そのもののよさではない。それを抒情にまで高め得たことの美しさ

である。その美しさの本源はいづこにあらうか。即ち良寛が脳裡に雪を降らせてゐるのではなく、意外罪とみだれ散る沫雪を凝然と見守つてゐることに基いてゐるのである。まことに良寛の歌そのものが「あわ雪の中に顯^た」つてゐるのである。

わたしはまたこの歌を誦する度に、源實朝の「得功德歌」と題する歌、「大日の種子^{しゆじ}よりいでて三昧^{さまい}耶^や形^{かたち}さまやぎやうまた尊形^{そんぎやう}となる」を想起するが、世人はわたしの偏癖を果して理解してくれるであらうか。

ももなかのいささむら竹いささめにいささか残す水莖のあと

初句は枕詞。第二句までは次句の序。「いささめに」は、かりそめに、少しばかり。歌意はいささか筆の跡を残すといふに過ぎぬが、この「いささ」を三たび繰返した諧協音の美事さは、これまた良寛調の有力な一要素といはねばならない。

ますらをの踏みけむ世世の古道^{ふるみち}は荒れにけるかも行く人なしに

「古道」は、佛道・詩歌道・書道等何道のことでもいい。一首、むろん萬葉調であり、しかも良寛の詩において著しく歌において乏しい激越な慷慨がここに奔騰してゐる。類歌に「述懐のうた」と詞書した「いそのかみふるの古道しかすがにみ草ふみわけ行く人なしに」があるが、これもまた佳作とせねばならない。

良寛の愛も和も、この嚴正さに根を据ゑてゐる。故にゆるぎなく極まりなく、融通するのである。彼は

人世の眞理に體達すべく敢て出家し、好んで辛苦の道を歩んだ。二十年間の鍛錬にも慊らずして更に聖胎の長養をつづけ、そのぎりぎりの點で一切空を悟得了すると同時に、翻つてやみがたい人間的愛念の世界に生きたのである。

いついつと待ちにし人は來たりけり今はあひ見て何か思はむ

文政十三年（天保元年）十一月以來島崎木村邸内の手狭な別舎に泄痢を病んでゐた良寛は、かねて佛門の法弟でもあり淨愛の對象でもあつた福島の貞心尼に「あづきゆみ春になりなば草の庵をとく訪ひてまし逢ひたきものを」と申し遣つたが、年もおし詰つた頃師の容態の俄かに惡化したと知らされた貞心尼が驚いて枕頭に見舞つた時、良寛の詠んだのがこの一首である。「とく訪ひてまし逢ひたきものを」にせよ、「今はあひ見て何か思はむ」にせよ、實に直接的であり、純一無垢な詩魂の露呈である。第三句、一本に「來たり來たり」とあるが、これも捨てかねるところがある。

良寛はやうやく年を越した天保二年一月六日、七十四歳を以て示寂した。昭和二十五年を距る百二十年の昔である。

はからずも二十首ばかりを評釋してしまつたが、これはわたしの漫然たる手抄で、本集にはこれらと價値を均しくするものなほ二百首を數へることができる點を斷つておく。

さて以上を顧みておのづと感得される良寛の歌の本質はそもそも何であらうか。まづこれを内面的にいふ。

一 良寛の歌は、人間即歌である。その人その心即ち歌である。またそれは生活即歌である。自然隨順の生活即ち歌の根蒂である。すべてはこの一事から派生していく。

二 良寛の歌には、ぬくもりとうるほひがある。溫潤玉の如きなごみとまどかさがある。豪宕にのしかるものや銳利に劈くものには缺けるが、題材の悲喜を問はず、溢れるばかりの情味に富んでゐる。人間に對しては素より、禽獸草木から命なき器什に至るまで、その懇篤な情愛には變りがない。森羅萬象無差別同格といふ坐禪辨道の悟達は彼の人間を形成し、形成された人間は彼の歌を成就してゐる。良寛といかなる人か、その歌によつて遺憾なくさながらに想見することができる。

三 良寛の歌は生活の實際に出でてゐる。眼前の事實に即してあるがままの流露を遂げてゐる。時に自然の閑寂相を捉へるかと思へば、また座右の卑近事をもたちまち詩化する。屈託なく障礙なく、ゆたかな感情の動くにつれて平易明快な言葉が氣韻躍動奕奕として繰り出される。これはいひかへれば、藝術における日常性の高さ深さの問題である。良寛の歌は意味内容によつて人を駭かすといふ類ひのものでなく、一見何程のことみなささうな事象の中に深く詩を感じ、何氣ない言葉によつてそれを高く現はす底のものである。奇を好み本物と似而非物の甄別のつかぬ者にとつては無味常凡に感じられるかもしれないが、素直